英語の統合型現在分詞に対応するフランス語の非定形動詞について

武本 雅嗣

１．はじめに

分詞構文の現在分詞は「先行性」「原因・理由」「同時性」「並立」「譲歩・対立」「継起」「結果」など多様な解釈を許し，文頭・文中・文尾いずれの位置も占めることができる。英語の例を挙げる。

(1) **Taking** off his hat, he bowed profoundly.

(2) The poor boy, not **knowing** what to say, remained silent.

(3) The volcano erupted, **killing** more than 20000 people.

フランス語の現在分詞構文もこのような統語構造をとるが，フランス語では現在分詞は英語ほど多用されない。代わりに最もよく用いられるのは，ジェロンディフである[1]。実際，次のような翻訳は非常に多い。

(4) a. 'Myra,' he said, **lowering** his voice and **choosing** his words carefully, 'I beg a thousand pardons. Can you ever forgive me?'

(Fitzgerald, *This Side of Paradise*：18)

b. — Myra, dit-il **en baissant** la voix et **choisissant** prudemment ses mots, je vous demande mille fois pardon. Me pardonnerez-vous jamais?

(Fitzgerald, *L'Envers du Paradis*：25)

また，英語では現在分詞が使用可能なのにフランス語では決して現在分詞が用いられないことがある。それは，英語の現在分詞が主節に途切れなく統合された場合である。英語とは異なり，フランス語の現在分詞は基本的に主節に組み込まれないので，統合型の現在分詞が用いられた英語の文と同じことを同様の構造で表現しようとすると，フランス語では別の非定形形式をとらざるをえなくなる[2]。このとき主節と結合するのはジェロンディフか à 不定詞である。

(5) a. Mom came **screaming** out of the kitchen.

b. Maman est sortie { ***criant** / **en criant** } de la cuisine.

(6) a. The old woman sat **knitting** in the sun.

b. La vieille femme était assise { ***tricotant** / **à tricoter** } au soleil.

(7) a. He earns his living **singing**.

b. Il gagne sa vie { ***chantant** / **en chantant** / **à chanter** }.

フランス語において問題になるのは，このような同時的・並立的な事態を表す場合のジェロンディフと à 不定詞の使い分けである。

ジェロンディフと現在分詞の相違についてはこれまでいろいろ言及されてきたが，ジェロンディフと à 不定詞の違いについては，HALMØY(2003)が少し触れているものの，本格的な研究はみられない。そこで本稿では，英語の統合型現在分詞構文に対応するフランス語の二種類の非定形動詞構文の制約を分析して，ジェロンディフと à 不定詞の選択基準を明らかにすることを目指す。さらに，英語の進行形 'be V-ing' に対応する 'être

V-ant’およびêtre à Vは今日の標準フランス語ではほとんど非文法的になっているが，他のロマンス語にはこれらに相当する形式が存在している点に着目して，‘コピュラ動詞＋非定形動詞’について考察を行い，今後のロマンス諸語の非定形動詞に関する言語横断的研究の足がかりとしたい。

(8) a. The girl is **singing**.
b. *La fille est { ***chantant** / ?***à chanter** } .
c. A menina está { **cantando** / **a cantar** }. （ポルトガル語）

2． ジェロンディフかà 不定詞か

2.1. 主節への従属度の違い

先ほど(7b)でジェロンディフとà 不定詞のどちらも使用可能な例を挙げたが，他には次のような事例がある。

(9) Il a perdu du temps { **à bavarder** / **en bavardant** } avec la voisine.
(HALMØY 2003: 142)

これに対して，次の場合にはà不定詞が用いられ，ジェロンディフのほうは不適切である。

(10) Il a passé des heures { **à bricoler** / ?***en bricolant** }. (*Ibid.*)

このことについてHALMØY(2003)は，(11)の文を示して，(9)のperdre du temps「時間をつぶす」とは違って，(10)のpasser des heures「時間を過ごす」にà不定詞だけが結合するのは，その主節だけでは意味内容が希薄で場所句的な要素を必要とするからだという趣旨の主張を行っている。

(11) Il a passé trois heures *({ au cinéma / à bricoler / en bateau }). (*Ibid.*)

要するに，主節の任意の要素としてはジェロンディフも可能だが，主節の必須の要素としてはà不定詞しか適さないということである。このことから，à不定詞は，ジェロンディフよりも情報構造上重要な役割を担っていると考えられる。実際，不可欠な情報として主節と一体化しているà不定詞は主節から切り離して前置することができない。

(12) a. Il a passé des heures **à bricoler**.
b. ***À bricoler**, il a passé des heures.

(13) a. Les enfants se sont amusés **à jouer** au football.
b. ***À jouer** au football, les enfants se sont amusés.

ジェロンディフとà不定詞の両方が使用可能な場合でも，やはりà不定詞のほうは前置し難い。

(14) a. Il a perdu du temps { **à bavarder** / **en bavardant** } avec la voisine.
b. { ?**À bavarder** / **En bavardant** } avec la voisine, il a perdu du temps.

(15) a. Il gagne sa vie { **à jouer** / **en jouant** } de l'accordéon.
b. { ?**A jouer** / **En jouant** } de l'accordéon, il gagne sa vie.

このような事実は，これら2種類の非定形の間には，主節への従属度に関して差があることを示唆している[3)]。つまり，同じように同時的・並立的な事態を表していても，ジェロンディフよりもà不定詞のほうが主節への従属度が高いのである。

主動詞が存在動詞の場合にà不定詞が用いられることが多いが，同じ存在動詞でも，場所句を伴う場合と伴わない場合とでは，場所句を伴わない場合のほうが節としての独

立性が低い。したがって，場所句を伴わない rester と結合する à 不定詞は主節への従属度が極めて高いということになる。次のような場所句を伴わない rester に直結する à 不定詞は不可欠の要素であり，ジェロンディフに置き換えることはできない。

(16) Zoé est restée des heures { **à regarder** / ***en regardant** } par la fenêtre.

(HALMØY 2003: 142)

そして興味深いことに，動詞 rester の滞在の意味が抽象化した場合，前置詞 à は落ちる傾向がみられる。この現象は，概念的な一体化の言語構造への反映による統語的変化の兆しだと考えられる。

(17) Mon chien reste **(à) garder** la maison.

(18) On est resté **(à) discuter** plus d'une heure.

さて，ここで主動詞の性質の相違の検討に立ち返ろう。ジェロンディフが主節の任意の要素であるのに対して，à 不定詞が主節の必須の要素であるという HALMØY(2003)の説明は，特定の事例については正しいとしても，次のような場合には当てはまらない。

(19) Ma mère était dans la cuisine { **à préparer** / ***en préparant** } le repas.

なぜなら，(20)が文として成立することから明らかなとおり，(19)の à 不定詞は必須の要素ではないからである。

(20) Ma mère était dans la cuisine.

となると，ジェロンディフと à 不定詞の使い分けは，主節が付加詞を必要とするかどうかというような情報構造的な基準ではなく，何らかの別の基準に従っていると考えざるをえない。次節では，両構文の主節の顕著な相違である主動詞のアスペクトの違いに着目して考察を行う。

2.2. 主節の他動性の違い

「同時性」や「並立」を表す à 不定詞構文の主節は，多くの場合，存在や姿勢を表している。次のミニマルペアを比べると，非定形動詞の選択に何が関与的であるのかがみえてくる。

(21) a. Zoé a travaillé des heures { **en regardant** / ***à regarder** } par la fenêtre.
b. Zoé est restée des heures { ***en regardant** / **à regarder** } par la fenêtre.

(HALMØY 2003: 142 を改変)

(22) a. Paul dormait { **en ronflant** / * **à ronfler** } bruyamment.
b. Paul était au lit { ***en ronflant** / **à ronfler** } bruyamment.

主動詞の性質の違いについては，HALMØY(2003)は静的か動的かということが関与していると指摘し，次のように主動詞が être の場合には à 不定詞しか用いられないとしている。

(23) Ils sont beaucoup comme lui, underground, en rupture d'usine, de lycée et de famille, { **à regarder** / ***en regardant** } passer les jours.

(*Le Nouvel Observateur*) (*Ibid.*: 144)

確かに静的／動的の区別がかかわっていると思われるが，正確に言えば，結合するのが à 不定詞かジェロンディフかは，主動詞が動態動詞か状態動詞かによるということになろう[4]。

では，なぜ主動詞が動態動詞の場合にはジェロンディフが用いられて，状態動詞の場合には à 不定詞が用いられるのであろうか。動態動詞と状態動詞の違いを他動性の観点から規定すると，それは＜運動性＞の有無ということになる。上の(21)の文を例にとれ

ば，明らかに＜運動性＞がある(21a)の主節にはジェロンディフしか結合せず，＜運動性＞が認められない(21b)の主節には à 不定詞しか結びつかない。他動性の観点をとることが妥当かどうかを検証するために，HALMØY(2003)が任意の要素か必須の要素かという違いが関与しているとして挙げている例をもう一度比べてみよう。

(24) a. Il a perdu du temps { **à bavarder / en bavardant** } avec la voisine. (=(9))
b. Il a passé des heures { **à bricoler** / ?***en bricolant** }. (=(10))

この場合も他動性の相違との相関を指摘できる。つまり，ジェロンディフも可能な(24a)の主節には＜意図性＞があるが，ジェロンディフが容認されにくい(24b)の主節には＜意図性＞はない。さらに，(25)のように，主節に＜意図性＞があって非定形動詞が「手段」と解釈される場合でも，(25b)のように à 不定詞も可能なほうは主節の内容が抽象的で＜目的語の被影響性＞＜目的語の個別性＞が欠けており，相対的に他動性が低くなっている[5]。

(25) a. Il s'est suicidé { ***à se jeter / en se jetant** } sous un train.
b. Il gagne sa vie { **à jouer / en jouant** } de l'accordéon. (=(15a))

以上の分析から，非定形動詞の選択には，他動性のパラミターのなかでも，とくに＜運動性＞＜意図性＞＜目的語の被影響性＞＜目的語の個別性＞の有無が関与的であると言えよう。ジェロンディフだけが適合するのはいずれのパラミターも認められて他動性が高い場合であり，一方，à 不定詞だけが適合するのはいずれのパラミターも認められず他動性が極めて低い場合である。そして，両方とも可能なのは，他動性が相対的に高いあるいは低い場合なのである。

ここまで，英語の主節に統合される現在分詞に対応するフランス語の非定形動詞の選択基準について考察してきたわけであるが，次章では，英語の‘be V-ing’に対応する形式について，通時的・言語横断的観点から考察を行う。

3． コピュラ動詞と非定形動詞の結合によるアスペクト形式

3.1. 現在分詞タイプ

進行形の問題に入る前に，まず，英語では，過去に現在分詞と動名詞と与格不定詞の間に形態的・音韻的交差が起こった結果，V-ing が現在分詞と動名詞の両方の機能を担っているのに対して，フランス語の V-ant は現在分詞でしかないということを確認しておきたい。フランス語のジェロンディフ en V-ant の V-ant もジェランド（動名詞）ではなく現在分詞とみなされている。なぜなら，V-ant は英語の V-ing のように主語や目的語や補語になれないし，en 以外の前置詞に伴われたり，所有形容詞によって限定されることもないからである[6]。

(26) a. **Teaching** is **learning**.
b. { **Enseigner** /***Enseignant** }, c'est { **apprendre** / ***apprenant** }.

(27) a. Appetite comes **with eating**.
b. L'appétit vient { **en mangeant** / ***avec mangeant** }.

さて，英語の進行形の起源について，井出（1981）は，由来するとされる中英語の前置詞を介した He is a-doing 型よりも He is doing 型のほうが使用頻度がずっと高かったことから，それより以前の古英語の＜beon/wessen＋現在分詞＞にまで遡れるとするモー

セらの見解（ラテン語の翻訳の影響も多少あったとみなしている）を支持している。さらに井出（1981: 30）は「He sat reading a book. とか I saw a dog running. とか He was there working. などの現在分詞を用いた構文が古くからあって，これが「進行形」を有利に発展させた」と述べ，進行形と現在分詞の他の用法との関連を指摘している。要するに，英語には，純粋な名詞的動名詞とともに，主節に統合される現在分詞も古くからあり，前置詞介在型の進行相形式が，文法化によって縮約し，継続相形式であった be V-ing と融合するかたちで発展していったととらえることができる。

一方，フランス語では，英語で進行形で表すところでも現在形がよく使われ，とくに行為の最中であることを明示するために迂言的な形式‘être en train de 不定詞’が用いられる。

(28) a. My father is **writing** a letter.
b. Mon père est **en train d'écrire** une lettre.

ただ，この形式は比較的新しく，18 世紀から 19 世紀にかけて別の形式に取って代わって定着した迂言的な進行形であり，実は，それまでは‘être 現在分詞’が用いられていた。それだけでなく，次節で取り上げるが，‘être à 不定詞’や，また‘être après 不定詞’も，継続相あるいは進行相の文法的なアスペクト形式であった（cf. PUSCH 2003）。しかしながら，現代フランス語では，最初に指摘したとおり，現在分詞はそもそも主節に組み込まれることがないし，前章でみたように，前置詞介在型であるジェロンディフは être と結合することはない。

(29) *Mon père est **écrivant** une lettre.

(30) *Mon père est **en écrivant** une lettre.

フランス語の現在分詞やジェロンディフの用法は他のロマンス諸語と異なっているが，その継続相・進行相形式もまた独特である。‘コピュラ動詞＋現在分詞’が継続・進行を表すアスペクト形式になっている言語はロマンス諸語にもあるが，フランス語では，一時それが文法形式として現れたものの，今では消失してしまっているわけである。英語の進行形‘be V-ing’に相当するこの形式は，主なロマンス語のなかでは，フランス語・ルーマニア語にはないが，スペイン語・カタルーニャ語・ブラジルポルトガル語・イタリア語にはある[7]（cf. BERTINETTO 2000）。(28a)に対応するスペイン語の文を示す。

(31) Mi padre está **escribiendo** una carta. （スペイン語）

‘コピュラ動詞＋現在分詞タイプ’の進行形があるロマンス諸語には 2 種類のコピュラ動詞すなわち individual-level と stage-level のコピュラ動詞があり，現在分詞タイプが結合するのは stage-level のほうである[8]。それに対して，この種の進行形がないフランス語とルーマニア語には，英語の be 動詞に対応するコピュラ動詞は一種類しかない[9]。ロマンス語におけるこの相関は偶然ではないように思われる。そもそも進行形によって描写される事態は一時的なものなので，現在分詞は individual-level のほうのコピュラ動詞とは結びつかない。ラテン語の stare「立っている」に由来する stage-level のいわば新しいコピュラ動詞を持つようになった言語では，‘新コピュラ動詞＋現在分詞’によって進行形が維持されやすかったものと考えられる。次節では，不定詞タイプの継続相・進行相のアスペクト形式について考察を行う。

3.2. 不定詞タイプ

à 不定詞は être を動詞とする主節と結合するのだから，‘être à V’が文法的な形式であっても不思議ではない。まず，次の英語とフランス語の対応形式をみてみよう。

(32) a. Paul sits **reading** a book.
b. Paul est assis **à lire** un livre.

(33) a. Paul is there **reading** a book.
b. Paul est là **à lire** un livre.

(34) a. Paul is **reading** a book.
b. ?*Paul est **à lire** un livre. （古語法・方言的）

(32b) (33b)のように姿勢を表す形容詞か場所句を伴っていれば，à不定詞はêtreが用いられた主節に統合される。しかしながら，(34b)のように，être との直接的な結合は，標準語では容認されない。16 世紀には頻繁にみられた‘être 現在分詞’と‘être à 不定詞’は 17 世紀なると急速に衰退していったが，‘être à 不定詞’のほうは 19 世紀の文献でも散見される。今日では，‘être 現在分詞’は完全に消失しているのに対して，‘être à 不定詞’は最近まで残っていたものの，ほぼ消えているということであろう。

ただ，‘être à 不定詞’はまったく不可能な構成というわけではない。次の実例のように，後ろに場所句を伴っていれば統語的に問題ない。

(35) Elle était **à m'attendre** sur le perron.
(BRIAND , *Maman, je pars: C'est à cause de papa* : 15)

しかしながら，やはり単独だと標準フランス語では容認し難いようである。

(36) ?*Elle était **à m'attendre**.

それでも，上に挙げた(33b)のタイプつまり là を介した形式は今なお残っている。

(37) a. Des jeunes gens qui les connaissaient étaient là **à les attendre**.
(PROUST, *À la recherche du temps perdu: Le côté de Guermantes* : 161)
b. Young people who knew them stood there **waiting for them**.
(PROUST, *In Search of Lost Time: The Guermantes way* :171)

フランス語では，かつて継続相・進行相形式であった‘être 現在分詞’は消え，それに代わる‘être à 不定詞’もほとんど用いられなくなっているが，今でも，là を介することによって，一時的存在の継続的行為を表しているのである。一方，本質的に継続的存在を表す rester は stage-level のコピュラ動詞に準ずる動詞であり，場所句を伴わずに à 不定詞と結合することによって滞在の意味が希薄化し，継続的行為を表すようになっているわけである。

最後に，ロマンス語の進行形に関する興味深い現象を指摘しておきたい。それは，中世フランス語にあった３つのタイプの非定形の継続相・進行相のアスペクト形式が，今日他の地域のロマンス語にみられるという事実である。そのうち２つのタイプの進行形はポルトガル語の地域差として存在している。

(38) a. *La fille est chantant.
b. A menina está **cantando**. （フラジルのポルトガル語）

(39) a. ?*La fille est à chanter.
b. A menina está **a cantar**. （ポルトガルのポルトガル語）

そしてもう１つのタイプは，西フランスの方言，北米のケベックやルイジアナおよびハイチの口語フランス語に今なお残っている。

(40)　Il est **après couper** les herbes.
'He is cutting the grass.'　(*Dictionary of Louisiana French*: 34)

本来時間的な「後」を示す前置詞・接続詞が用いられて継続的行為を表すようになっている。このようなアスペクト形式については，稿を改めて文法化の観点から論じることにする。

4．　おわりに

本稿では，まず，英語の統合型現在分詞に対応するフランス語のジェロンディフと à 不定詞が結合する主動詞の性質について分析を行い，非定形動詞の選択には、主節の他動性のパラミターのうちとくに＜運動性＞＜意図性＞＜目的語の被影響性＞＜目的語の個別性＞の有無が関与していることを明らかにした。ジェロンディフしか用いられない場合はいずれのパラミターも備わっていて他動性が高く，à 不定詞しか用いられない場合はいずれのパラミターも認められず他動性が低いということ、そしてどちらも可能な場合は他動性が相対的に高いあるいは低いということを指摘した。さらに，コピュラ動詞と非定形動詞との結合によって進行形が文法形式になる現象について考察を行い，現代フランス語では，２種類のコピュラ動詞をもつ他のロマンス語にはみられる‘コピュラ動詞＋現在分詞／不定詞’という形式はもはやほとんど消失しているが，一時的存在を表す動詞句と à 不定詞の結合形式つまり‘être là à 不定詞’および‘rester (à) 不定詞’は継続相の文法形式とみなしうるということを指摘した。

最後に，ロマンス諸語の非定形動詞の比較研究の今後の展望について述べておきたい。HALMØY (2003: 37-58) は，前置詞 en＋現在分詞で構成されているフランス語のジェロンディフはラテン語にも他のロマンス諸語にもない固有の非定形形式であるという趣旨のことを述べているが，確かに，形態はもちろん，機能的にも特殊である。フランス語のジェロンディフ gérondif は現在分詞とは明らかに形態が異なっているが，スペイン語のヘルンディオ gerundio は現在分詞と形態が同じになっていて区分がなくなっているのに対して，イタリア語のジェルンディオ gerundio は現在分詞と語尾形態が異なっている。用法的には，ジェロンディフとヘルンディオとジェルンディオの間には，共通点もあるが明らかな相違点もある。たとえば，スペイン語では，フランス語でジェロンディフでも現在分詞でもなく à 不定詞で表されるところで，英語のようにヘルンディオ(現在分詞）が主節に統合される。

(41)　a.　La fille était assise { ?**en lisant** / ***lisant** / **à lire** } un livre.
　　b.　La niña estaba sentada **leyendo** un libro.　(スペイン語)

また，イタリア語では，フランス語でジェロンディフではなく現在分詞で表されるところで，ジェルンディオが用いられる場合がある。

(42)　a.　{ ***En étant** / **Etant** } malade, il n'est pas allé à l'école.
　　b.　**Essendo** malato, non è andato a scuola.　(イタリア語)

近年，アジアやヨーロッパの一部の言語における副動詞 converb の研究が盛んになってきているが，ロマンス諸語の converb 的な非定形形式を比べながら分析すると，それぞれの言語の特徴が浮き彫りになるであろう。ロマンス語における converb の比較研究については今後の課題としたい。

【注】

1) 英語とフランス語の分詞構文の「結果」用法の違いについてはUCHIDA(2002)が詳細な分析を行っている。

2) フランス語にも，例外的にtambour battant「(太鼓を叩きながら→) どんどん」のように，動詞句内の要素になるものもある。ただし，この古い語順形式はもはや副詞句と化している。

(i) Le Président a mené **tambour battant** la réforme.

3) à不定詞が文副詞的に振舞う場合には当然前置されるし，主動詞に関する制約もない。

(i) **À vrai dire**, je vous ai menti.

このようなà不定詞は独立的で，主節への従属度は低い。

4) なお，たとえ主動詞がêtreであっても，補足的に付加された現在分詞なら並立関係を表しうる。

(i) Il était debout près de la fenêtre, **attendant** la rentrée de sa mère.

5) gagner sa vie「生活費を稼ぐ」に関しては，辞書などにà不定詞を伴う例が示されているし，近代フランス語の文献ではà 不定詞の使用例が多くみられる。しかしながら，現代フランス語では，à不定詞よりもジェロンディフのほうが好まれる傾向がある。統計的な調査を行っていないので断定はできないが，おそらく，現代フランス語に移行するにつれてジェロンディフの使用が拡がってきているのであろう。

6) 古フランス語では他の前置詞も使われていた。当時可能だった語順を保持しているà son corps défendant「やむをえず」や，今では名詞とみなされているde son vivant 「存命中に」はその名残である（cf. HALMØY 2003)。ジェロンディフの形態‘en V-ant’自体は12世紀の古フランス語にはすでにあったが，現代フランス語からみればジェロンディフ的にも現在分詞的にも用いられており，今日のジェロンディフと現在分詞を区別するenの有無の規則は17世紀まではっきりしなかったようである。

7) ただし，イタリア語では進行形はスペイン語ほど使われない。この種の進行形を持つすべての言語の用法がまったく同じというわけではないが，ここでは深く立ち入らない。

8) ここで現在分詞「タイプ」としたのは，スペイン語の進行形は‘estar＋現在分詞’だが，イタリア語のそれは‘stare＋ジェルンディオ’とされているからである。

9) ラテン語のstare「立っている」に由来するesterは現代フランス語では古語になっている。ちなみに，フランス語のresterはラテン語のstareに接頭辞re-がついたrestare「残る」から来ている。

【資料出典】

BRIAND, Ch. (2005): *Maman, je pars: C'est à cause de papa*, Cheminements.

FITZGERALD,F.S. (1950) : *The Great Gatsby*, Penguin Books.

FITZGERALD,F.S. (1950) : *Gatsby le magnifique*, traduit de l'anglais par VictorLiona, GRASSET.

PROUST, M. (1992): *À la recherche du temps perdu: Le côté de Guermantes*, Gallimard.

PROUST, M. (2003): *In Search of Lost Time: The Guermantes way*, translated by Mark Treharne, Penguin.

VALDMAN, A. , Rottet, K. J. (2010): *Dictionary of Louisiana French: as spoken in Cajun, Creole, and American Indian communities*, Univ. Press of Mississippi.

【参考文献】

ANCELET, B. J. (1994): *Cajun and Creole folktales: the French oral tradition of South Louisiana*, Univ. Press of Mississippi.

ARNAVIELLE, T. (2003) : «Le participe, les formes en *–ant* : positions et propositions», *Languages*, 149, 37-54.

朝倉季雄 (2002) :『新フランス文法辞典』, 白水社.

BERTINETTO, P. M. (2000): «The progressive in Romance, as compared withEnglish», In Ö. Dahl (ed.) *Tense and aspect in the languages of Europe*, Berlin-New York: Mouton de Gruyter, 559-604.

DUFFLEY, P. (2003) : «Les conditions de production de l'effet de sens 'imperfectif' avec la forme en *–ing* de l'anglais», *Languages*, 149, 86-99.

FRANCKEL, J.-J. (1989) : *Étude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz.

GOUGENHEIM, G. (1971 [1929]), *Etude sur les périphrases verbales de la langue française,* Paris: Nizet (réimpr.).

HALMØY, O. (2003) : *Le gérondif,* Ophrys.

春木仁孝 (1991) :「ジェロンディフ―現在分詞構文との比較―」, 『GALLIA』, 31, 12-21, 大阪大学フランス語フランス文学会.

春木仁孝 (1993) :「ジェロンディフの複合形について」, 『フランス語学研究』. 27, 73-75,日本フランス語学会.

HASPELMATH, M. & KÖNIG, E. (1995): *Converbs in cross-linguistic perspective: Structure, and Meaning of Adverbial Verb Forms -Adverbial Participles, Gerunds-*, Berlin: Mouton de Gruyter.

早瀬尚子 (2002) :『英語構文のカテゴリー形成 認知言語学の視点から』, 勁草書房.

樋口万里子 (2010): 「現代英語の進行形の歴史と制限 - 歴史認知言語学の試み」『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要』, 23, 11～80.

井出 功一 (1981): 「英語『進行形』の歴史文法的研究」, 『駒澤大學外国語部論集』, 14, 13-31.

今井澄子(2009):「英語進行形文法化の認知言語学的解釈」,『認知言語学論考』,ひつじ書房,227・273.

LACA, B. (2004): «Les catégories aspectuelles à expression périphrastique: une interprétation des apprarentes «lacunes» du français", *Languages*, 141, 85-98.

LIPSKY, A. (2003) : «Pour une description sémantique et morpho-syntaxique du participe français et allemand», *Languages*, 149, 71-85.

PUSCH, C. D. (2003): «La grammaticalisation de l'aspectualité. Remarques sur les périphrases à valeur progressive en français», *Verbum. Revue de Linguistique*, 25: 4, 495-508.

クロード・ロベルジュ他 (1983) :『現代フランス前置詞活用辞典』, 大修館.

SPANG-HANSSEN, E. (1973) : *Les prépositions incolores du français moderne*, Gads.

UTIDA, M. (2002) : *Causal Relations and Clause Linkage: Consequential paticiple clauses and their use*, Osaka University Press.

内田充美; 柳朋宏 (2005): 「英語とフランス語における<コピュラ+不定詞>構文 : タイプの異なるパラレルコーパスを用いた検証(最終記念号)」 『女子大文学』6, 大阪女子大学英語英米文学専攻編, 37-58.

VIGIER, D. (2003) : «Les syntagmes prépositionnels en « en N » détachés en tête de phrase

référant à des domaines d'activité», *Lingvisticae Investigationes*, 26, 97-121.